

森本 茂著『大和物語の考証的研究』

中 田 武 司

五八

森本茂氏が昭和四十八年に上梓された『伊勢物語全釈』は今日研究者にとつてはもはや必読の書となっているといえよう。その一冊に収められている諸説批評や諸論の考察展開は、伊勢物語の注釈史上特筆すべき一書といつても過言ではない。特に氏の「歌物語」の変遷を追求しながらの考証論は定評がある。その森本氏が今度『大和物語の考証的研究』を上梓されたのである。伊勢物語の研究から大和物語への連続性は、歌物語の原流がそうである如く、その展開と方法においてはかなりの範囲に気を配る努力が要求されるのである。

『源氏物語の風土』や『伊勢物語論』とともに「大和物語」の研究がまとめられたのだから、まさに役者が出揃った感がする。さて、『大和物語の考証的研究』は全体が七章十五節から構成されている。まず第一章は「大和物語の人物考証」である。ここには「二条の御息所」「閑院の御」「閑院の大君」「としこ」「故後の宮」「武蔵」「ならの帝」などがとりあげられている。「二条の御息所」についての考証はまず、大和物語諸伝本の表現に注目する

基本論を経て、次第に「二位」とする諸伝本を避け、「二条」を正確とするに至る。以下は「二条の御息所」とする伝本を中心に論を進める態度である。この考証は北村季吟の『大和物語抄』が「二条の御息所」には該当者がいないので「三条の御息所」（藤原定方女）が正当と説いて以来、この考えが用いられていたのだが、この説に正面から批判を加えたものである。論旨明解である。近年「二条の御息所」は「二条高子」かとする雨海説にも言及し、更に「二条」と称された人物の邸宅跡を「拾芥抄」や『日本紀略』などの史書にあたり考証する一方、御息所についても、和田英松氏の『修訂官職要解』の例を引きつつ更に「伊勢」が二条東洞院に住んでいたことに着目し、合わせて「伊勢」に関わる内部徴証と勅撰集歌や今昔物語、伊勢集などから「伊勢は宇多天皇の召人的存在の御息所であったとみられる」とし、大和物語の第一段には「伊勢の御」とあり、一四七段には「伊勢の御息所」とある点に着目している。しかしこれで論考が終るのではない。「伊勢の御息所」と一四七段で記したものをなぜ一八段では「二条の御息所」

としたのであるうかという問題に移る。そして一八段は「故式部卿宮」(敦慶親王)と伊勢の物語であることを考証し、「故式部卿宮」「二条の御息所」といはずぐに敦慶親王と伊勢のことと大和物語の聞き手(読者)には分かったのだと結論する。

伊勢は温子(大和物語では「故後の宮」)の薨去後、敦慶親王の寵愛を受けて中務を出生している女性である。この二人の関係は「伊勢集」では詳細にまとめられている点はずでに関根慶子氏や岡崎知子氏によって論証されているところであるが、これらの諸論をもふまえて大和物語の人物考証として公表されたものである。

第二節の「閑院の御」については「閑院の御」と「閑院」と称される人物が大和物語では同一人であることを論証し、閑院の場所や以後の伝領関係を「日本紀略」や「左経記」「尊卑分脈」「紹運録」などから考証し、閑院は清和天皇の皇子である貞元親王のことで、藤原基経の娘を妃とした皇子と論を進めている。その上古今集歌(八三七番歌)にも言及し、その詞書に「藤原忠房が昔あひ知りて侍りける人の身まかりにける時に、とぶらひにつかはすとてよめる」とある忠房に注目し、忠房の妻は貞元親王の皇女であることや、「昔あひ知りて侍りける人」の昔とは、忠房と昔の愛人の関係で、このことは閑院の御がよく知っていた筈だとのべ、「閑院の御」とは「仮りの呼び名」であったのだという新見が展開されている。

右の論考の中には「貞元親王と基経女の没後」については、資

料の少ない点で、結局は閑院跡がどうなったかは明らかではない、とされるが、氏の見解からして、この点の結論を読者としては、是非とも欲しい思いがしてならない。しかし本書にはその後の研究も収められていることを付言すべきであろう。このようにして、前の論考で今少し欲しいと思われる内容については、氏自らがその問題を遺漏なく努力される統考がなされている。とりわけ「閑院の御」と「南院の今君」との問題(同一人か否かの問題)は長い時間をかけての考証の跡が顕著であり、氏の考えとしては、かつて南波浩氏が、日本古典全書で別人説をのべられたところであるが、ほぼそれに近い考えのようである。この閑院の論は、次の

第三節「閑院の大君」論とも無関係ではない。

第三節では、「源宗子女」が「閑院の大君」である説を批判する考証論である。清和天皇皇子貞元親王(閑院)の長女が正に「閑院の大君」であったのだというものである。この問題は従来「勅撰作者部類」「尊卑分脈」などを根拠として「源宗子女」とするものが多かったが、これを否定する点で秀れた論考である。この論考はかつて「国語と国文学」(昭61・2)に公表されて論を呼んだ考証である。本節には副題が「源宗子女説批判」とある如く、今後大和物語の研究者には必読不可欠の「閑院論」の結論でもあるといえよう。

第四節は「としこ」と本名(?)で登場する人物の考証である。この「としこ」は大和物語中には十章段にわたって登場する女性だが、これまでには比較的論考の少ない女房であった。この人物に

ついで、氏は、これまでもしばしば利用されている資料である『拾遺集』の「承香殿のとしこ」に焦点を当て直し、再考し、大和物語の内部徴証へと言及する。角田文衛氏が「源和子(女御)に宮仕えし、女御が醍醐天皇の崩御後、承香殿を引き扱うまで、女御の許に出仕していた」と説かれた考えに半ば賛成しているが、宮仕えの期間については異説とし、「醍醐天皇の崩御より七、八年前までのこと」とし、『吏部王記』や『河海抄』以下の資料を用いて論述し、再度大和物語の内部徴証にもどり「承香殿に宮仕えした女房」に注目する。そして「承香殿の出仕は延喜十八、九年の頃」とまで詳述する。論旨は明解だが、資料の軽重に多少の不安をもつ。しかし従前の研究者の見落しを鋭く指摘してはばからない。

第五節は「故後の宮」「武蔵」の人物論であり、第六節は「ならの帝」の論である。「ならの帝」は古今集仮名序でも大きな問題となる如く、いささか厄介な問題である。大和物語の場合も「ならの帝」は平城天皇であり、人麻呂と同時代の人物という印象や伝承が強く残されている。しかし「ならの帝」がその実、文武、平城なのか、平城、桓武なのか。またこの両帝の二重像なのか。あるいは奈良以前に居座された帝なのか、これらは「伝承の途中でさまざまな虚実がからみあってできあがったもの」が真実ではないのかとの考えが基となり、「虚構伝承」と「歌物語と歌語り」という二重構造を指摘し、後者を中心に、勅撰集歌を資料として論述している。この中には、時として表現語彙の分析などもある。即ち「なむ」「む」の使用頻度の参考も加えての視点も含まれて

いる。しかし、やはり大和物語の内部徴証へもどり、「史実に基づく歌語りの第一部」と、「伝承説話に基づく歌語りの第二部」とに区分できるものと分析し、両者の差異が明確に存在するという。しかしこの論旨は、氏自身も述べる如く、言葉の多寡によって創作意識の正確さがどこまで根拠となりうるかには問題がある。この問題はそれだけに今後の続編を期待するところである。ところで、各方面からのアプローチの中で「ならの帝」論は着実に進展している。その中で大きな問題がある。それはなぜ「ならの帝」と「人麻呂」とが恰もセットの如く歌語られるのかという問題である。とりわけ大和物語にはこの感が強い。この点について氏は、次章の「大和物語の生成」の中で詳論されている。

「大和物語」はかなり「歌枕意識」をもっている点の指摘は氏にはじまるものである。「歌枕大観」の著者である氏にして考える問題だと思いが、「ふるさと」意識が「ならの帝」と「人麻呂」をセットにする根拠の論は興味のある問題であり、歌枕に関する氏の文章は生き生きとするから不思議である。氏の研究態度が自とそのような筆致に運ばせるのであろうか。

第二章は「大和物語の人物表記」である。これは第一章とは大いに異なり、同一人物ながらも、何故変化をもつて表現されているのか、その意図を追求した論である。ここでとりあげられているのは「故式部卿の宮」「先帝」「ならの帝」などである。その中には物語を改める時に「先帝の御時(一三一一段)」、「同じ帝(一三三二)」、「先帝の御時(一三四)」の如く連続内容と思われるのに、何故同一

表現をとらないのかの問題である。これは『大和物語抄』以来、改めて表記するのは人が代る故、だとされている。これに対して現代の多くの注釈はそれぞれに論点を異にしながら、人物の異なる場合もあればそうでない場合もあるという。これらの問題を森本氏は各人について詳述している。この点で本章は単章ではあるが第一章とも深く関わって考証されている。それだけに従来忌避されがちであった問題が整理されたといえる大切な一篇である。

第三章は「大和物語の生成」に関するもので、四節からなっている。

大和物語は見方を変えると、歌語り、歌物語の典型であると同時に「歌枕」の宝庫でもあるという。氏はこの「歌枕」についてはすでに述べた如く大著をものさされている学者である。「歌枕」の中でも万葉集時代の歌枕の存在性に疑問を提示し、真の歌枕は平安初期に成立したものではないか、また六歌仙頃にその目安を置くべきとの論が陳述されている。こうした大きな問題に関して、大和物語と万葉集に関する「歌枕」を具体的に考証する。その結果、万葉集に見えるところで、後世「歌枕」として用いられるものが、単に万葉集では、一回性の地名であることが多いことを指摘している。しかも、この一回性地名(氏は「一回の地名」という)が「歌語」や「歌枕」と呼ぶにふさわしいものとなる経緯をのべている。例えば、有間皇子の「磐代の浜松が枝を引き結び」(万葉、二一四一)の「結び松」は、持統・文武両帝の紀伊の湯行幸の折の歌にも、「長忌寸意吉麿」結び松を見て哀咽しふる歌二首」

とある他、万葉集には四首が存在することを詳述し、これが平安時代になると、かなり多くの歌が詠まれるようになり、やがて定着すると、いう論展である。この「結び松」の他に「忘れ貝」「住吉」などの名所と歌枕との関係を考証し、万葉集中には地名と景物、それに歌語りが結びついて「歌枕」の意識を形成した傾向にあったのだとのべられている。とくに大和物語(一五五段)の「安積山」に関しては氏の考えが広く深くのべられていて、重厚な論である。この第一節「安積山の段の生成」の論は昭和六一年に日本文学風土学会で講演された内容を更に加筆されたものだが、評価の高い内容である。前述の「歌枕」論とも絡むが、その発生と生成・完成の時期設定は小沢正夫氏が「古今集の世界」で時期的には森本氏と同じ平安初期論をのべられたが、森本氏はこの論を安積山という陸奥国を舞台とした大和物語の歌語りをもって論証したといえる内容でもある。とりわけ、なぜ安積山という舞台が選ばれて大和物語に収められたのかに関しては興味ある論がのべられている。そして、伝承歌の伝播の道程や歌物語の中に組み込まれる安積山がどのようにして創作意識をかりたてたのかについても詳論されている。そしてこの章の諸論が次章へと連携して一段の発展を見せている。「安積山」の論に続いては「姨捨山」の段(一五六段)の生成の論である。「姨捨」(伝承を整理するかたわら、その伝承的素材が奈辺にあるのかを探ぐる意味で、まず「俊頼髄脳」と大和物語との関係に注目する。それによって更に今昔物語集を加えてその方向性を探ぐり、第二段階において和歌を加え、

『新撰和歌（巻四）』『古今和歌六帖（一）』と古今集歌を添えて古注が考証し論ずる問題点を整理するという方法である。注目すべきは古今集歌の中にすでに「姨捨山伝説」をふまえたものがあることの指摘であり、小町集以下の私家集にもこれが存するといふ。また「躬恒集（西本願寺本）」の屏風・障子歌にもその系累の存在を指摘する。そして、この「姨捨山」の伝承は古今集において「歌枕」の「姨捨山」として確立し、これがもととなって大和物語へ収められ広がったものと結論する。この過程において「姨捨山伝説」は通り一べんのものではなく、多様性の存在を指摘し、「棄老伝説」や「親棄山」とはその性格を異にするものであるとべている。これは大切な指摘である。即ち大和物語の伝承には、現実を踏まえながらも人間的な苦悩がテーマとなり、新しい文学的な再生が眼目となっている点のあることを主張する。これらの指摘は、大和物語を読む者の基本姿勢と言及する。

続いては「在中将諸段の構成」論である。これは「生成」ではなく「構成」とある如く業平関係の七章段（一六〇～一六六段）の構成の論で、古い説話と新しい説話という単純論を批判する。そして真に大和物語はあえて区分すれば、第二部と称せるのは一四七段以後と一線を区画する。そうした中で、在中将関係の伝承は一部の後半に集中する点を軸に考証が進展する。とりわけ類話の末尾発想「よにあるほかのことどもなり」という類似に注目し、これは在中将の「歌がたり」とみるか「伊勢物語」を根幹としたものとするか、あるいは業平集の一種からとみるかについて考証

する。結論としては業平の伝承・伝承歌は、あるものは「伊勢物語」となり、あるものは「歌がたり」となって流布し、この両者を補い合う形で巷間に伝わったものが大和物語に収められたとするものである。本著のみを頼りとする者には多少物足りなさを感じるかもしれないが、氏のこれまでの「伊勢物語論」を知る者はこれ以上の論は望まないであろう。とりわけ、三つ（衣、草花、今日）に素材分けをした構成論は文献と伝説との問題を総合的に歌物語論の中で考証された新見とみるべき一点でもある。この一連性は第四章の「大和物語と後撰集」の論を設定させる。第五章でも「大和物語の作者」という難問に対峙する。枚数の関係で第五章へ移ると、ここでは「伊勢物語知頭抄」（伝源経信）が「伊勢が作りたれば」とのべているのは今日動かし難いとする。そしてそれを補完する意味で「伊勢集」と「大和物語」を内部・外部徴証としての論述で、説得力のある内容である。そしてこの「伊勢の御」説を更に補うのが第六章に展開の「解釈」であろう。

いずれとも必ず内部徴証に再度徹する論は読み応え十分で、今後この一著は大和物語の研究には不可欠の重きをなすこと必定であろう。心より森本学の前進をお祝ひしたい。

（一九九〇・一〇・二〇発行、和泉書院、九〇六四円）

（なかだ・たけし 専修大学教授）